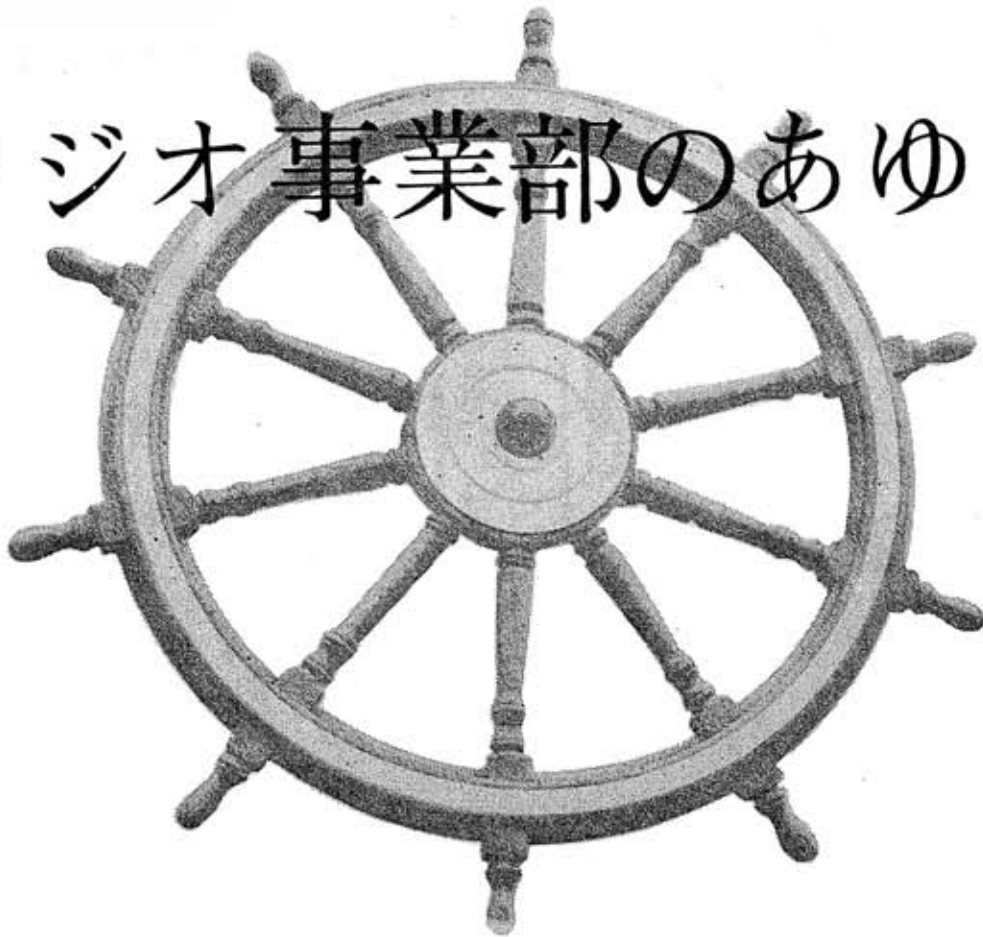


ラジオ事業部のあゆみ



ラジオの製作を決意

昭和五年、わが国ではようやくラジオが普及しはじめた年である。当時ラジオは、時代の寵児としてもてはやされ、その将来性には大いに期待されるものがあったが、なにぶんにも不完全きわまるもので、一般にラジオは故障の起るものだということが常識となっていたので、商品としてははなはだ扱いにくいものであった。

その頃、松下電器の代理店からは、ラジオセットの製造発売を要望する声が目に見え強くなっていた。そこで、日頃からラジオの国民性、将来性というものに関心を寄せられていた現・会長は、松下電器で製造を始める前に、ラジオ業界の製造販売の実体について、綿密な調査を行なうことを命ぜられた。その結果、松下電器でラジオの製作販売を行なうからには、ラジオについての知識や技術のない当時の電気店でも容易に販売できる故障のないセットを造り出さなくてはならないという結論を得られたのであった。

そこで松下会長は、代理店のご要望に応え、いささかでも業界の発展に貢献しようと、ラジオセットの製造を決心されたのである。

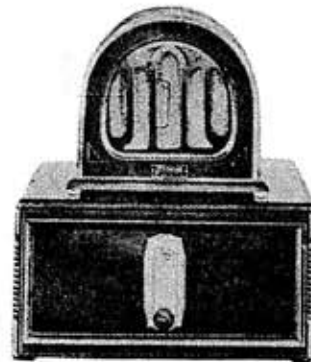
主な製品



R-48 四球ペントード受信機
昭和10年製造



R-43 4球ペントード標準型
昭和7年製造コンクール当選の意匠



226 三球受信機
昭和5年国道電機で製造

第七工場の誕生

昭和五年八月、当時のラジオメーカーの中で、技術的にも信用があり、松下電器の経営方針に共鳴されるK氏と合資で、資本金五万円の株式会社国道電機を設立し、生産を開始した。その販売には、松下電器の販売網を活用して努力したのであった。ところが意外にも、製品は故障の続出、返品また返品で、信用は失墜し代理店の労を無にすることになった早速調査したところ、松下電器の販売網の多くは、電気屋さんが主であり、ラジオの技術を持っているところが比較的少ないことに問題があった。

そこで現・会長は、当初の方針通り故障のない、だれもが販売できる理想のセットを造るべく、昭和六年三月に、欠損二万円を負担してK氏と別れ、国道電機を松下電器第七工場（現・電熱器事業部）と命名し、再出発することになった。同時に、現・中尾専務に理想に合致したラジオを考案、設計するよう命ぜられたのである。

セットコンクールに当選

その後、中尾専務を中心とする十

数名の研究部員の日夜たゆまざる研究の結果、三ヵ月後に、まず理想に近いセットが完成された。折しも東京中央放送局でラジオセットの懸賞募集があったので、新設計の三球再生付と固定再生付のピリケン型セット二種を応募したところ、三球再生付の方が見事一等に当選したのである。

十月に入り、第七工場では、当選したラジオのシャーシーを八角形スピーカーを冠した黒紫色のうるし塗りキャビネットに納め、当選号と名付けて、これを中心に理想の方針に基づいて、大量生産販売の計画が樹てられ、ナショナルラジオの本格的生産が始まったのである。

門真ブロックの建設

昭和七年九月、国民のラジオに対する関心は日に日に高まり、その普及はすばらしい伸びを示した。

松下電器においても、その需要に応ずべく、ラジオ事業を拡張する必要に迫られた。そこで、店員養成所の建設とともに、将来の発展を期するため、大開町から門真に本店および工場を移すとともに、ラジオ製造の本拠も、第七工場から門真新工場に移転することになり、ここに松下電器にとってまことに歴史的な建設

の第一歩が着手され、八年五月にその完成をみたのである。同時に、三事業部制の実施により、ラジオ関係部門は第一事業部となり、新工場においてナショナルラジオの本格生産が開始され、すばらしい活躍がはじまったのである。八月二十八日にはラジオ東京出張所が開設された。

黄金時代を現出

昭和九年に入って、研究開発に力を注いだ結果、数々の優秀なるセットを世に送り出し、事業は順調のうちに進展し、ナショナルラジオの真価が認められるようになった。

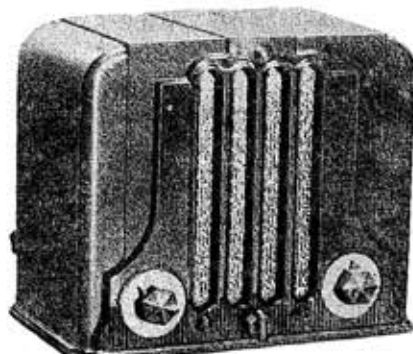
十年八月には、全国にわたる大活動により、本店倉庫の在庫は日を追って減少し、本店工場は生産に迫われ、月産二万台を突破する盛況ぶりであった。しかし、なお拡張の度はゆるまず、ラジオ事業制覇の意気込みで、全国的な大売出しが盛大に催され、拡充に努力したのである。

十二月、株式会社に改組され、ラジオ部門は松下無線株式会社として新しく発足することになった。

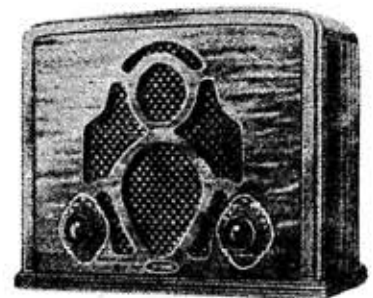
十一年には、コンソール型電蓄の発売やアンプリファイヤーの発売、また小型プラスチックラジオの発表など、商品の面でも新しい需要を喚起し、六月切売上は前年六月切に比



GR-100 6球スーパーコンソール電蓄 昭和11年製造



R-11 3球ペントード受信機 昭和11年製造



R10-A 3球ペントード丸型受信機 昭和11年製造

し約七四%の増率を示し、まったく驚異的な躍進ぶりであった。しかしラジオの需要増大とともに、業者間の競争が激しくなってきたので、打開策の一環として、販売店と無線会社との関係を密接にし、相互扶助の実をあげて業界の安定を計る趣旨のナショナル受信機連盟店制度が作られた。

十一年初めより増産に次ぐ増産に工場を拡張する必要に迫られ、新工場の増築に着手してきたが、十一月十五日、第一、第二、第三、第四の組立工場と第一、第二、第三塗装工場および倉庫課、その他機械室、ボイラー室など全八棟が完成し、十二月二十五日には、工場の増築完成を機会に、松下無線の偉容を関東の電器業界に紹介するという趣旨で、工場見学宝塚招待大売出しが行われ大成功をおさめた。また第一組立工場では、コンベアシステムを採用し能率の向上をはかった。

十二年に入り、生産・販売両面にわたる進展にはめざましいものがあった。九月には大阪、神戸、京都、広島、金沢にサービステーションを設置し、販売網の強化をはかったのである。この年のナショナルラジオの生産台数は、実に十一万一千台という驚異的な数にのぼり、全国占有率も四七%を確保した。

十三年四月には、松下無線東京研究所を設置し、研究開発の面にも盤石の構を固め、ナショナルラジオの確固不動の地位を築きあげたのである。

その後も激しい競争場裡にあって常に業界をリードし、十六年の軍需生産開始まで、全国津々浦々にナショナルラジオを送り続け、松下電器ラジオ事業の一大黄金時代を形成したのであった。

灰色の時代へ

十六年八月、無線会社は松下社長に代って井植副社長が新しく社長に就任された。十一月には、門真に無線会社研究所の建物が完成し、無線東京研究所より、この建物に移転、東京研究所の建物は無線東京工場に移管された。そして十二月、わが国は運命の太平洋戦争に足を踏み入れたのである。

十七年三月、無線会社東京工場より、陸軍に無線機を初納入したのであるが、民需品であるラジオの生産は、材料の関係で日を追って低下しつつあった。それでもこの十七年には月産三万台を数え、わが国ラジオ生産高の三割を占め、全国第一位を確保していたものであった。かくして、漸次軍需品生産に切換

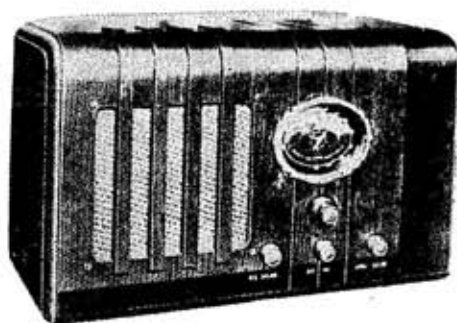
えられ、ラジオ生産は同年七月設立の朝鮮松下無線、十月設立の台湾松下無線、十二月設立の満州松下無線で生産されたものである。

十月には無線会社軍需部が、陸軍監理工場に指定されることになり、十二月には海軍の無線機が完成し、上納式が挙行され納入された。

その当時より戦争が激しさを加えるに至り、敵機の来襲に備え工場分散疎開が始まったが、その第一陣として十七年末、航空電器部が泉北郡松尾村に内田工場として、次に十八年夏、通信機部が奈良県郡山町に郡山工場として、また同年末より北河内郡寺川村に四条工場を新築し、逐次移転して、十九年三月には疎開完了することになった。

その間、十八年十二月には徴用令伝達式が挙行され、従業員はその工場に現員徴用となり、翌十九年一月無線会社は軍需指定工場となつて、新規徴用工や女子挺身隊、学徒報国隊の動員が続けられた。

同年四月、内田、四条、東京の各工場ならびに巨椋池試験所が軍需工場として追加指定を受けた。続いて七月、郡山工場も同じく指定され、九月には、松下電器戦時指令体制が制定せられて、週休制度も廃し、第一、第三日曜日のみを休日として、日夜を分たず、ひたすら軍需品の生



6S-3 6球受信機 昭和12年製造



GR-40 4球卓上電器 12年製造

産増強に総力を結集して邁進したのであった。

同年十一月には会社の組織が改定され、松下無線株式会社ほか三社を産業本社に吸収合併して、松下無線は新たに、松下電器産業株式会社無線製造所と呼称されるようになったのである。

明くる二十年三月より、再三大阪が大空襲に見舞われることになったが、幸い無線関係工場の損害は皆無に終わったものの、従業員の被災するものは多数にのぼった。そこで四条工場では、地下工場を建設するべく北河内郡岡山に、四月地鎮祭をあげてその建設にかかったのであるが、竣工をまたずに、八月十五日の無条件降伏を受諾することになり、軍需生産は全面的に終止符をうち、ながい悪夢の終局を迎えたのであった。

ラジオ生産の再開

太平洋戦争は終わったが、戦いは日本に大きな傷痕を残した。そして、敗戦によって国民生活は窮迫し、世相は混乱した。

しかしながら、松下電器ではいち早く民間生産への転換が言明されきびしい社会情勢の中にも、民間生産再開の力強い歩みをはじめたのであった。

ラジオセットの生産も、二十年九月には、オールウェーブ受信機の試作を完成し、二十一年六月に、待望のオールウェーブ受信機R-1の生産開始で再開されたのであった。

二十二年三月には、G-1ニ格蘭D型電気蓄音機の組立を開始し、南海高島屋において盛大に演奏披露会を開催した。

十一月には、無線製品の◎販売の普及ならびに小売店、代理店、特約店の松下電器に対する期待と、信頼を高め、親密な協力を願うため、さらにお得意先の工場見学により会社の生産復興に刺戟を与えることを目的として、生産復興工場見学大売出しを全国一斉に開催し、ラジオメーカーの先端をゆく商戦として、業界を覚醒し、行きづまっていたラジオ販売の打開につとめたのであった。二十三年には、電力事情の好転や人心の安定などによって、ラジオの需要は次第に高まり、NHKの聴取登録数も戦前の八十%に回復するなど、市場は活況を呈するにいたった。

特需ブームと民放の開始

二十五年から六年にかけて、ラジオ業界は不況による経営不振から、中小メーカーの倒産が相次いで起ったが、わが社では民間放送の具体化

などで、一応需要の見通しがついたところで、普及型新スーパー受信機を発表した。二十六年六月には朝鮮動乱が勃発、八月に入り動乱による特需や、秋の需要期と民間放送開始を控え、スーパー受信機の需要が増し、本格的増産態勢をとったのである。

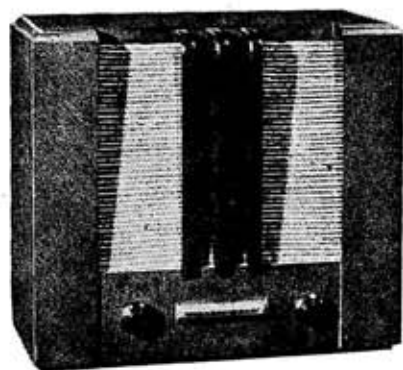
いよいよ九月一日から民間放送が開始された。そのため、生産・販売ともますます活況を呈し、セットの過大在庫は解消しナショナルラジオの品不足は全国的な現象となって、急ピッチに生産を続けた結果、十二月に月産一万五千七百台という、当時としては画期的快記録を樹立し、高能率生産の実績を示したのであった。

テレビの披露と

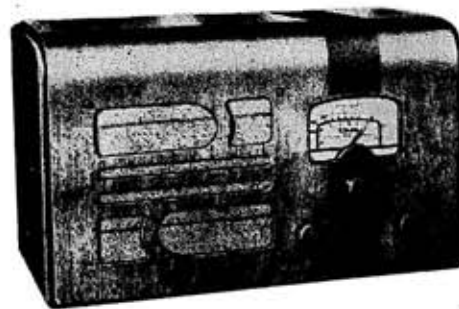
皇太子殿下のご見学

二十七年十二月、本格化するテレビ放送に対して、販売普及の充実を期するため、テレビセットならびにパーツの発売を開始した。

また、ナショナルテレビの披露と技術陣の研究成果および実習説明会を東京、大阪、名古屋、京都において、代理店、連盟店の方々を招き開催し、同時にイメージオルシコンカメラの実演を行なって好評を博した。



R-4M 4球マグネチック受信機
昭和15年製造



Z-20 4球受信機 昭和13年製造

二十八年二月、エリザベス英国女王戴冠式に天皇陛下のご名代として出席される皇太子殿下は、ご出発の前に伊勢神宮にその旨を報告のためご西下されたが、二十七日ご来阪の際、当社ラジオ工場にお越しになった。そして部品から完成までの組立工程を興味深くご覧になられた。

テレビの生産

わが社のテレビ研究は、昭和十一年に着手され、十三年四月には十二インチブラウン管使用の試作テレビが完成した。その後、次々と研究改良を重ねられ、十五年には新しい受像機が完成し、十二月に一般に公開されたのであるが、太平洋戦争によってテレビ研究もやむなく一時中断された。

戦後NHNのテレビ放送開始に先がけて、二十六年夏より本格的にテレビ受像機の研究を再開することとなり、当時もっとも研究の進んでいたNHKと技術提携を結んで、東京工場（現・品川工場）で、七インチ簡易型テレビの試作が開始されたのである。そして次第にテレビ製造の態勢が整ってきたので、二十七年八月に第一事業部技術部から分離して、テレビ部が新設され、十一月にナショナルテレビの第一号一七K一五三

一が完成、発売されたのである。その後もラジオ工場テレビ部として着々と増産態勢を整えてきたのだが、テレビ事業の将来の発展と重要性を考え、八月、第一事業部から分離独立して、第六事業部として発足することになった。

第二ラジオ工場の発足

二十九年六月、時代の要望に即応したプラスチックキャビネットによる小型ラジオを量産するため、旧松下金属の一部に第二ラジオ工場が竣工した。この工場は、材料倉庫から完成品倉庫まで作業工程が、すべて合理的に装備されたコンベアリフトあるいはシュートで結ぶ近代的生産方式が採用され、その画期的成果には多大の期待が寄せられ、はなばなしく発足したのである。そしてこの工場の技術と設備の総力を結集した新型のポータブルラジオ一千台が、九月二十五日、ニューヨークへ輸出された。

三十年九月には、組立工程を、よりオートメ化するためのプリント配線によるポケットスーパー三B一六六七が、日本で最初の印刷配線応用ラジオとして、第二ラジオ工場から送り出されたのである。

この年、わが社のポータブルおよ

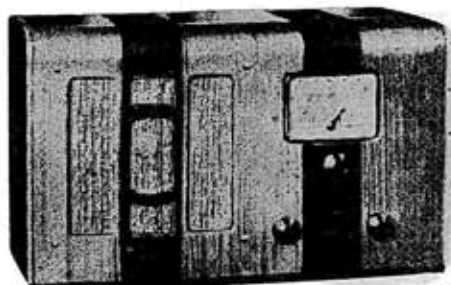
びパーソナルラジオの総輸出台数は二万台を突破し、今日の基盤が着々と築かれていたのであった。

組織の変更

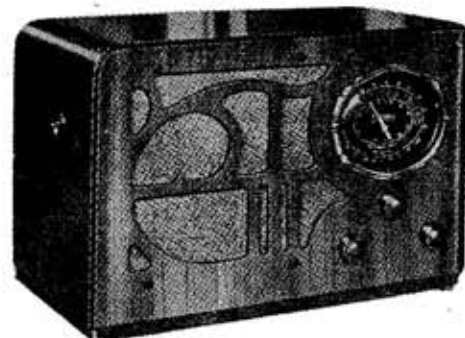
二十九年八月に全社の組織が、四本部十事業部に改められた。この組織変更に対応して、第一事業部の専門細分化と部門ごとの強化充実をはかるため、十月二十一日、ラジオ工場を第一ラジオ、音響、部品の三工場に分割し、東京工場、高瀬工場、第二ラジオ工場を含め、直轄六工場をもって新発足した。

三十一年十一月には、会社の業容の進展にともない、全社的に製造品目を表わす名称に変更することとなり、第一事業部の名称をラジオ事業部と変更した。

三十三年八月、無線事業本部の茨木移転とラジオ事業部の業容拡大に鑑み、ラジオ事業部の下にラジオ部と部品部を新設し、ラジオ事業部の研究、資材および技術の三部は無線事業本部に直属させて、本部長が直接指導することになった。またこれまでの営業部および総務部を廃止し第一ラジオ、第二ラジオ、オーディオの三工場および総務、人事、マーケティング、ラジオ、オーディオ、サービス、発送、輸出の八課が設置



放送局型-123 4球トランスレス受信機 昭和16年製造



R-4D3 4球受信機 昭和15年ごろ製造

された。また部品、音響、拡声機、変圧器の四工場および経理、人事、庶務、施設、営業の五課が設置された。

続いて、三十四年三月には、ラジオ部、部品部の営業部門を機能的に統合し、強力な販売推進体制をとるため、両部に営業部が設置され、十月には、一段の発展を期するため開発部、技術部の二部が新設された。同時に、第一ラジオ工場にオーディオ工場を併合して、ラジオ工場と改称し、キャビネット関係は第一ラジオ工場より分離して木工工場となった。十一月には、これまで松下通信工業(株)の東京工場で生産されていたオーディオ商品の製造が移管されラジオ事業部東京工場として一層の合理化をはかることになった。

事業部の二分割

三十三年八月に設立されたラジオ事業部部品部は、ラジオの組立用部品を造るための部品工場であったがテレビ用部品や通信機用部品の生産が増加するとともに、他メーカーにまで供給するようになった。そこで将来さらにわが社の無線機回路部品事業を一層発展させる必要から、三十四年五月二十一日、ラジオ事業部より分離させ独立事業部として発足

した。

また、ラジオ部もトランジスタラジオ、ハイファイラジオならびにステレオなどの需要増加にこわえ、FM放送の開始などから、機動性のある生産体制を確立し、組立専門メーカーとして同業他社との競争体制を整え、輸出においても積極的な活動を推進するため独立し、ラジオ事業部として新発足したのである。

設備の拡充と近代化

門真ブロックの建物の中には、昭和八年に工場が創建された時のものが多く、老朽化し根本的に補修改築の必要があった。またラジオの増産にともない各工場は作業面積の不足をきたしてきたので、工場の拡張と近代化が進められた。

まず、三十一年三月に音響工場が完成し、わが社の音響技術開発に一段の威力を加えた。十二月には、ラジオグラフ、プレーヤーの専門工場として東京工場に新オーディオ工場が完成した。また研究課の業務の拡大にともない、十二月十四日研究課新館二棟が完成した。三十二年五月には、音響工場に隣接して抵抗器工場が完成。八月には資材倉庫が、十一月には東京工場第二棟(測定器工場)が相次いで竣工した。三十四年五月

には、ラジオ新厚生会館が完成し、従業員の福利厚生面の一段の充実がはかられた。

また昭和八年に建設以来、二十六年間の長きにわたってナショナルラジオの組立が行なわれてきた第一作業場の建物が、三十四年四月中旬より解体され、十一月三十日には延建坪五千坪、L字型の鉄筋三階建の近代的な工場が完成した。

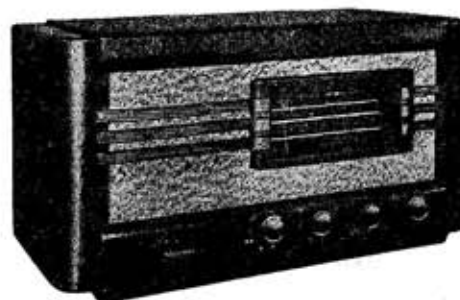
トランジスタラジオの生産

わが社では、昭和三十二年二月に電子工業高槻工場にフィリップス社との技術提携により、半導体工場が建設され、トランジスタの生産が着々と進められたが、他メーカーはすでにトランジスタによるポータブルラジオを発売して、真空管式ポータブルラジオの分野に大きく進出していたのであった。わが社も、トランジスタの生産本格化とともに、たち遅れをとり戻すべくトランジスタポータブルの生産を急ぎ、三十二年五月に、その第一号ポータブルラジオ六石一バンドUB-160を発売し、販売戦線に加わったのであった。

電子工業でのトランジスタの生産の時期がおくれたことよって、技術・販売面においての一步のおくれ



5S-19 1バンド5球スーパー
昭和24年11月製造



8A-1 3バンド8球オールウェーブスーパー
昭和21年8月製造

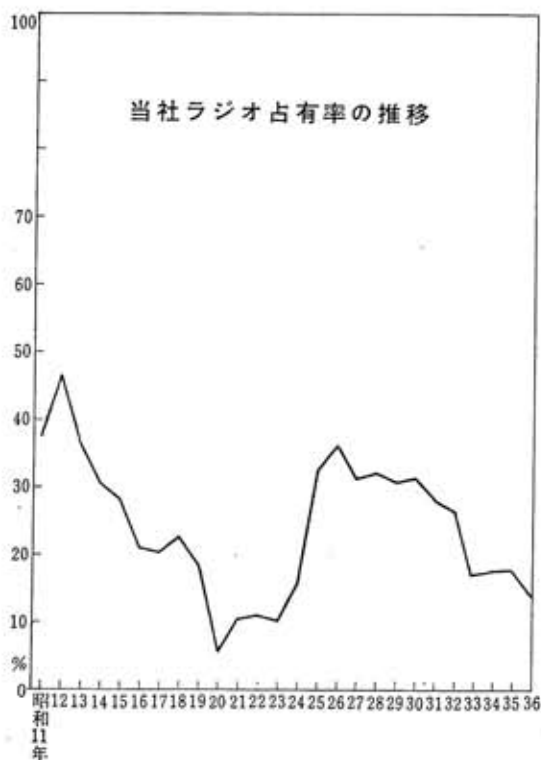
をとり戻すとともに、今後の激烈な技術競争にあつて優位を確保するため、さらに研究が進められた。そして六月から九月にかけて、ラジオ事業部の総力を結集した七石二バンドE A—一七五やE B—一八〇、E B—一六五などを次々と発売し、最高水準をゆくトランジスタラジオとして好評を博し、市場に大きく前進した。三十三年七月には、ドイツ、アメリカへ合計六千台が輸出され、海外にもナショナルの名が認められるようになった。その後も八石二バンドオールウェーブA T—二五〇や九石二バンドオールウェーブA T—二一〇などを次々と発表、本格的生産体制を整えて、一大飛躍期をむかえた。三十四年には水銀電池使用の世界最小の六石二バンドT—一〇や、八石二バンドルームラジオD T—三九五を発表。三十五年には七石二バンド時計つきT—四八を発表し、三十六年に入って多くの新製品の他に、トランシーバー第一号T—一を発表したのである。この間のトランジスタラジオの需要増加はめざましいものがあった。

ハイファイからステレオへ

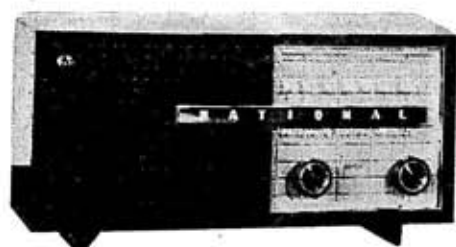
二十九年中頃から、音の高忠実度を求めるハイファイラジオの需要が

高まったので、十一月に五球マジックつきB L—六〇〇を発表した。三十年に入ってハイファイラジオの生産が本格化し、スピーカー、ピックアップ、アンプなどのハイファイパーツの新製品も次々と設計生産されたのである。また、時代の要求に応じて、C F—六一〇、七四〇、七九〇の三機種が、C Fシリーズとして発売された。さらに続いてU F—七三五やU F—七三〇、七七〇、三Dシステム採用の七一〇などが続々と市場に送り出され、ハイファイ時代が到来したのであった。そしてオーディオ商品のめざましい需要増加に対応し、これら特殊品の生産をより合理的かつ一元的に推進するため、六月ラジオ事業部にオーディオ工場が新設され、八月二十七日機構部品

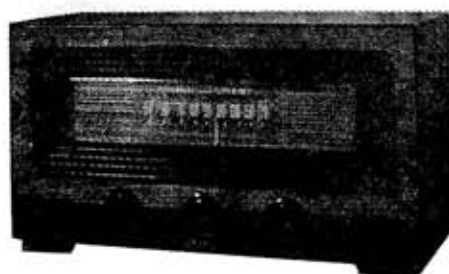
作業場あとへ移転したのであった。また日本短波放送のナイター放送開始から、二バンドラジオの需要が高まり、八月からはとんどのセットが二バンドに切りかえられた。三十二年十月他社に先がけて免税四スピードプレーヤーE L—八六一を発表し、十一月には業界のトップを切つてF M付ハイファイラジオE A—七六五を発売した。三十三年十一月にはステレオプレーヤーの発売に続いて、ステレオアンサンブルH E—二〇が発売され、ステレオ時代をむかえたのである。三十六年九月将来のラジオ関係事業の進展に対し、商品別による専門細分化をはかるため、ラジオ事業部からステレオ関係部門が独立し、ステレオ事業部として新発足したのである。



当社ラジオ占有率の推移



DX350 1バンド5球スーパー
昭和28年10月製造



NS-200 1バンド5球スーパー
昭和27年4月製造